

市川平三郎先生

Röntgen賞受賞



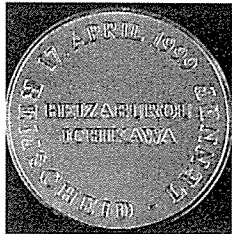
市川平三郎先生(昭和23年卒・国立がんセンター名誉院長)には1999年度のRöntgen-Plakette(レントゲン賞)を受賞され、去る平成12年1月15日、東京プリンスホテルで、丸山雅一先生(昭和41年卒)が代表発起人になって祝賀会が開催された。

創設した権威ある賞である。同市はデュッセルドルフ市から東に30km位の所に位置し、風光明媚な小都市である。これまで80人を超える科学者が受賞しているが、その中には多数のノーベル賞受賞者が含まれていることから、レムシャドウ市ではRöntgen賞をレムシャドウ市のノーベル賞と呼び誇りにしているという。

市川先生は日本人として二人目の受賞者で、最初の受賞者は1989年度の阿部光幸先生(京都大学名誉教授)である。市川先生の受賞理由は、消化器放射線診断学への貢献、特に胃癌の早期診断についての業績である。

先生の略歴・業績についてはご存知の方も多いと思うが、改めて紹介すると、昭和23年千葉医科大学を卒業、インターン終了後、第一内科(石川憲夫教授)入局、白壁彦夫先生と共に消化管の放射線診断について精進され、昭和34年千葉大学放射線学教室が開設され、寛弘毅教授が赴任され、その助教として活躍。同年6月米国学、37年国立がんセンター放射線科医長、同51年同病院院長に就任。日本医学放射線学会長、日本

▲ Röntgen-Plakette 記念メダル



癌治療学会長、WHO国際胃癌情報センター代表等も務められ、朝日文化賞、NHK放送文化賞、勲二等瑞宝章も受賞されている。

今回の受賞の決定的インパクトになった「Atlas of X-ray Diagnosis Early Gastric Cancer」(医学書院1998)の刊行であることは云うまでもなく、さらに欧米の学者に胃癌の早期診断に二重造影法の有効なことを認めさせた努力が評価されたことによる。

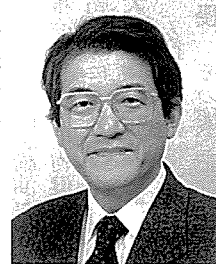
授賞式は去年4月14日、レムシャドウ市のレントゲン博物館に隣接するレントゲン・ギムナジウムで行われた。ドイツ駐在久米大使も出席され、首席市長からの喜びと感謝の祝辞があった由である。

去る1月15日の日本での祝賀会とは全く内輪の会であったが100名以上の親しい人の集会であった。最初に40分市川先生の講演を拝聴し、祝賀会が盛会裡に開催された。なお、最後に土産として市川先生自筆の「啄啄同窓」の色紙と「ドクター平三郎の世界漫遊記」(タケハヤ出版)という著書を頂戴した。この著書を若いものはな同窓会員に読んで頂くことを切望する。

奥井勝二(昭28)

就任の挨拶

富山医科薬科大学医学部長



寺澤捷年(昭45)

要因があればこれを取り除く努力をし、更によりよい方策があればそれを採用する方向で進めば良いのです。この単純明快な事柄を制度的に無理にいじり回しても決して良い結果は生まれません。国立大学の独立行政法人化問題は今年の夏頃までに結論が出るようですが、教育の現場に採算性や効率性のみが持ち込まれることを危惧しています。

勿論、自己点検や外部評価をとおして問題点を掘り起こし、より良い方向に自己革新を行うことも必要でしょう。

同窓の皆様のご支援を得て、全力で2年間の任期を全うしたいと思っております。何卒宜しくお願い致します。

附属病院ニュース

病院長 山浦 晶(昭40)

医学部附属病院の主な出来事(平成11年11月~12年3月) 平成11年11月~12月 職員

職員の資質の向上と、国際化に対応する目的で職員の海外派遣を実施した。

第1班(班長・伊藤晴夫教授)はアメリカ合衆国、第2班(班長・税所宏光教授)はヨーロッパ(イギリス、評価の書類作成に忙殺され、学生や患者が二の次になってしまつては本末転倒です。独立行政法人化を含めた国立大学を取り巻く一連の動きには医学部本来の正常な活動を阻害しかねない危険な要素を内包していると考えています。

急医療や臓器移植医療の患者搬送手段として有効なヘリコプターによる災害訓練を実施した。

訓練の内容として①医療チームの派遣訓練、②被災患者の受け入れ訓練、③臓器の搬送訓練

12月15日~16日 医学部学生の手道部による花展「花と安らぎ2」を開催

12月22日 第7回いのはな音楽部院内コンサート開催

患者さん約250人が熱心に耳を傾けていた。

12月31日 2000年問題越年体制

越年体制は病院長を対策本部長に、教官、技官、事務官等総勢322人体制で対応。

1月12日 第1回有識者懇談会開催

広く学外の有識者から自由な意見を聴取し、本院の改革と発展に資することを目的に、病院長諮問機関として設置。

国立大学病院としての試みに広く注目を浴びた。1月31日 医療事故防止セミナー

本院の「ヒヤリ・ハットレポート」から見た医療事故防止対策の検討と、押田茂實日本大学医学部法医学教授による「医療事故防止対策と医療訴訟」の講演を

行った。
教職員40人余りが参加し、熱心に討議された。

2月23日 ディズニールランドのミッキーマウス&ミニマウス来院。子供たちから拍手・喝采を浴びた。ベッドから起きられない患者のため、病室を回って励ましを行った。



3月23日 医学部卒業謝恩会にて、院内ボランティア活動(患者のための「なのはな文庫」設立)を行った卒業生の浅野由美・門脇正美さんに病院長から表彰が行われた。医学部学生の院内ボランティア参加のアピールも行われた。



教

室

だ

よ

り

薬理学講座(分子細胞薬理学)

昭和千葉医科大学において福田得志教授が初代教授となられてから、林彦之助教授、小林龍男教授、村山智教授と引き継がれ、平成4年から現在に至るまで五代目の中谷晴昭が薬理学講座を担当しています。教室は現在、鈴木俊雄助教授、植村展子助手、小倉武彦助手、坂下育美教務職員、玉川正次技官、古澤良恵技官が職員であり、薬理学大学院生1名を含め、第三内科の大学院生3名、泌尿器科1名、製薬企業からの受託研究生3名の総勢15名で研究を行っています。その中心は循環薬理であり、特に心筋細胞のイオンチャネルの病態における変化、受容体制御に関する研究、新たな作用機序を持った抗不整脈薬の創出を目指した電気薬理学的研究を行っています。具体的な研究プロジェクトとしては、(1)細胞膜 Δ Ca²⁺感受性、(2)チャネルの心臓系における病態生理学的役割の解析、(3)新たな心臓系治療薬の創出、(4)心不全に伴う不整脈の発現機構の解析と治療薬の開発、(5)理想的なIII群抗不整脈薬の開発、(6)新たなCa²⁺チャネルのクロニング、(7)変異腎アミノ酸トランスポーターの機能解析、(8)脊髄虚血神経障害におけるCa²⁺の役割の解析等、多岐にわたっており、脊髄虚血の仕事は鈴木助教授、パッチクランプ法を用いた電気生理学的実験は植村助手、分子生物学的実験は小倉助手を中心に進められています。また、これらの実験を行うにあたっては千葉大学医学研究科高次機能系分子機能制御学、分子生体機構学、第三解剖学等の基礎系講座のみならず第三内科、第一外科、整形外科、泌尿器科等の臨床系講座のご協力を頂いております。特に分子機能制御学の清野教授、三木助手には Δ Ca²⁺感受性 Δ Ca²⁺チャネルのノックアウトマウスを供給して頂き、循環系におけるこのチャネルの生理的役割の解析を行っています。この様に「分子から生体までの薬理学」を目指して幅広い研究を行い、

ある程度の成果を上げる事ができました。それも当講座の職員はもとより、教室に出入りして下さった約19人にもわたる研究者のご協力と深く感謝する毎日であります。これまでに教室の研究体制の基盤は何とか達成されたと思っていますので、これからはより独創的、先端的の研究を目指したいと考えております。

教育面では、疾病治療の重要な部分を占める薬物治療の基本的概念を修得させるため、比較的多くのコマ数を頂いて講義、実習を行っています。年々、新たな種類の治療薬が増えておりますが、それらの薬物の病態における作用機構、適応、副作用について、臨床薬理学的観点からの教育を含めて、分子機能制御学の清野教授、分子生体機構学の木村教授、薬剤部の北田教授にもご協力を頂きながら教育を行っています。今後「エビデンスベースドメディシン」および「テーラーメイドメディシン」という概念のもとで臨床的有効性および個人の遺伝的体質に基づいた先進的薬物治療が行われようとしており、それらに十分対応できる医師の育成を目指しての薬理学教育を行っています。

衛生学講座(環境労働衛生学)

もう既に多くの先生が御指摘されておられます様に、千葉大学医学部、薬学部の学府化、学術院化および国立大学全体の独立行政法人化を控えた本学でも大きく変革を迫られています。研究の高度化はもとより、医学教育も更に改革する事となり、平成12年度から本学部も全国に先駆けて新たな医学カリキュラムを開始しようとする所です。この事により、本学部も研究面と臨床面で

衛生学講座は、千葉大学医学部の前身である千葉医科大学の発足に伴い、大正12年4月に松村壽教授によって主宰されたのが始まりで、平成元年7月から第5代目として、能川が講座を運営しております。現在、教授1名、講師1名、助手2名、大学院生6名(内2名は中国およびミャンマーからの国費留学生)、研究生2名、委託研究生7名、合計19名の研究スタッフが、技官1名、事務補佐員1名のサポートを受けて、環境衛生学および労働衛生学を中心とした研究を展開しています。

環境衛生学分野では、「カドミウムを主とした重金属による健康影響」がメ

バランスの取れたより良い医師の育成を目指しており、大学競争時代への生き残りをかけ、より魅力ある千葉大学医学部へと医学部一同が総力を上げて努力しています。薬理学講座一同もそれに少しでも寄与する事が出来る様、努めて行きたいと思っておりますので、ののとは同窓会の先生方のこれまでに劣らぬご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

教授 中谷晴昭

賞を受賞しました。7年には能川が国際疫学会に招待され、「イタイタイ病」のパネルを展示し、また、日本公衆衛生学会ではシンポジウムに「環境汚染の過去、現在、未来」でパネラーとして参加しました。10年には環境庁、日本衛生学会、日本産業衛生学会、日本公衆衛生学会等の後援で、国際シンポジウム「カドミウム環境汚染の予防と対策における進歩と成果」を開催し、十数名の外国からの招待研究者をはじめ、国内外の研究者、地域住民らの参加を得ました。平成11年3月には、第2代目教授の谷川久治先生が開催されて以来40数年ぶりに、千葉で日本衛生学会総会を主催いたしました。吉田亮元千葉大学長に名誉会長、県衛生部長と県医師会会長に副会長にご就任いただき、4日間、延べ3千人の参加者がこの地に集い、「健康・保健・労働・環境」をテーマに活発な討論がなされました。翌年には能川が「イタイタイ病ならびに環境カドミウム汚染による人体影響に関する研究」で第2回日本衛生学会賞を受賞しました。最近では、こうしたカドミウム汚染地域での研究を出発点として、いわ

ゆる非カドミウム汚染地域での低濃度カドミウム暴露による健康影響に研究の中心を移行しています。我々が算出した米中カドミウム濃度の安全値が、政府が流通を禁止している値よりも低い値であること、一般環境中の低濃度暴露によって腎への影響が認められることを見出し、学会や研究会において、予防医学的観点からの取組みを提唱しているところでは、労働衛生分野では、事業所をフィールドとして確保し、講座の若手研究者を主体に環境管理、作業管理および健康管理の実践と、その理論的体系化に取組んでいます。運動や睡眠時間等の生活習慣や、職種の違い、三交替勤務等の労働環境が健康に与える影響の検討、VDT作業の1日許容時間の検討等、最近少しずつ、産業界の先生方の指針となりうる研究成果が上がっております。

学生教育は、3年生の衛生学と、4年生の社会医学実習（公衆衛生学講座と分担）を受持っています。衛生学の講義は、学生に教科書の勉強では学ぶことのできないものを掴みとってもらいたいと、先輩の先生方をはじめ、多くの分野の先生方に非常勤講師としてお

越しいいただき、ご協力を賜っています。また、環境衛生学の一環として環境測定実習を行い、労働衛生学的視点を養うために企業見学実習を実施しています。社会医学実習を含めて、衛生学が実学であり、社会医学であることを学生に理解してもらいたいと、かなり精力的に取組んでいます。また、学生教育のみならず、

法医学講座（創傷病態病理学）

能川は千葉県医師会の産業医学研究委員長として、産業界を対象とした卒後教育にも尽力しています。歴史ある衛生学講座をますます発展させねばと、力を尽くしておりますが、ゐのはな同窓会の先生方には、今後とも宜しくご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

教授 能川浩二

法医学講座が開設されたのは昭和3年(1928)でありま

すから、70周年を過ぎたところでありま。加賀谷勇之助、宮内義之助、木村康の各教授により主宰され、私が4代目の教授として平成3年に就任致しました。

法医学の取り扱う範囲は極めて広いことから、研究領域は多岐にわたりますが、加賀谷教授時代の教室の研究は血液型抗原を中心とした血清学的研究が主なものでありました、多くの教室員によりアイスラー・加賀谷抗原系の研究などこの方面で多くの業績を上げております。

加賀谷教授は俳人（凡秋）としても高名であり、句会やはぎ会の指導をされ、俳句の面でも多くのお弟子さ

んを育てられました。お弟子さん達によって大学に通

われていた小径の傍に句碑が建てられ、その北側の谷は現在でも凡秋谷（現附属病院前）と呼ばれております。宮内教授時代は社会医学としての実践的法医学活動

を重視し、この観点から損傷と凶器に関する研究が開始され、特に自動車事故損傷の特異性に着目され、新しい交通事故の法医学の体系的基礎が築かれました。その後の木村教授時代から現在に至るまで血清学的研究から発展した血液、組織の遺伝標識に関する研究と損傷の研究は当教室の研究テーマの2本柱となっております。血清学的研究は赤血球の血液型から白血球型に重点が移り、HLA型を

中心とした研究が行われ、さらに現在はHLA型とDNA多型分析に移行しています。HLA型の研究も基礎的な研究より法医学的応用への研究に重点をおいています。DNA多型に関して現在SNP多型については法医学的応用についても研究を行っています。損傷に関する研究は以前から引き続き交通事故損傷の分析の他、損傷の病態の研究として続けられております。

法医学活動の一つとして臨床医学における診療にある実地法医学としての鑑定があります。鑑定の事例から教育、研究のための資料、研究のアイデアを得ることもあり、重要なものであります。鑑定の主たるも



のは司法解剖であります。事件多発の千葉県下の事件死体の司法解剖をすべて担当しております。

学生の教育は従来から行われていました。血液型学を含め法医学全般にわたり講義を行っております。欧米と違い、我が国では死体の検案を行う監察医がおかれていたのはごく限られた地域であり、したがって卒後医師となった場合、検案を依頼される場合が少なからずあり、また最近では国家試験でも法医学の問題が出題されることがあります。これらの際に充

分対応できるようにすると、現在医事法制的講義はありませんで最低必要な医事法制、臨床でも必要となる血液型についての知識を身につけることを主たる目的として講義、実習を行っております。本来は医学倫理についても講義を行うべきでありましたが時間的にも手が回らない状況でありました。カリキュラムの改

正により医学倫理についても講義も別に行われる予定ですのでよろこばしいことでもあります。当教室からは法医学のみならず臨床医学の分野でも多くの人材が輩出しておりますが、法医学関係では旧くは友永得郎長崎大学名誉教授、近年では上山滋太郎獨協医大名誉教授、津金澤督雄鹿児島大名誉教授などあります。しかし、これは基礎系医学全般に云えることでもあります。最近では法医学を専攻しようという医学部卒業生が少ないことが、悩みであります。教室員の数は少数であり、教育、研究、鑑定業務を何とかやりくりしているのが現

放射線医学講座

（放射線機能学）

教授 木内政寛

放射線医学講座は昭和29年(1954)に開設され、初代教授として東京大学から寛弘毅先生が赴任されました。その後、有水昇先生が主催され、平成8年から伊東久夫が担当させていただいております。今年で開講以来46年目を迎えることになりました。放射線医学には放射線診断、放射線治療、核医学診療の3部門があり、各大学のそれぞれの教室が特徴を

状であります。社会の複雑化に伴い法医学の必要性は今後益々高まる可能性はあっても低下することはないと考えられます。若い医学徒がこの方面に積極的に進まれることを望んでおります。現在、大学も改革を迫られ、医学部の組織の改組も取りざたされています。法医学は基礎系医学の中の社会医学に属していますがかなり個性的な分野であり、他講座と共通な組織機構を持つことになじまない部分もあります。いかにその特徴を残して、かつ有機的な組織体の構成員になるかが今後の問題となるところであります。

てきました。放射線治療は化学療法との併用も多く、この分野でも積極的な治療が行われ、現在までこの伝統は引き継がれています。しかし、放射線診断は市川平三郎先生をはじめ学外で活躍された先生は多くいらっしゃいますが、学内は手薄な状態でした。昭和40年代後半に血管造影が進歩し、昭和50年代になってCTスキャン、その後MRIというコンピュータを駆使した断層診断機器が進歩しました。当教室はこの時に診断を専門とする医師の育成がうまくいかず、その後も放射線科としては診断が手薄な状態が続いてきました。最近では、若手の先生方の努力により、教室内でも急速に放射線診断力とimproved functional radiologyの技術が進歩して、他大学の放射線診断を専門とする教室に引けを取らないレベルまで達してきております。この力を早く学内・外にアピールして、放射線科の存在を明確に認めていただけるようにすることが、現在の最大の課題です。

それぞれの部門に専門家を配置するには余りに少ない人員です。今後も大幅な増員はあり得ないと思われ、教室の特徴を打ち出すための方策が問われてくると思われ、これは医学部の学生教育にも影響しています。欧米はもとより本邦でも、多くの大学で放射線診療における放射線科の業務が明確になっていきます。本学では放射線診断を各診療科でも行っているため、学生に放射線科の特徴と領域をどの様に伝えるかに苦慮しております。放射線科は放射線部と表裏一体の関係にあります。放射線部の北原教授には絶大なご支援

を頂くと共に、明確な放射線科の確立を急ぐように叱咤激励を受けております。放射線診療は急速に機器や技術が進歩し、診療領域が拡大しているため、研究は臨床的研究が主体となります。放射線診断と核医学では、疾患や病状に関して如何に有用な情報を提供できるかにあり、撮像法や画像の再構成が主な課題となります。また、放射線治療では副作用が少なく、治療率の高い治療法の開発が主となります。現在、これらの課題に放医研との共同研究も含めて、積極的に取り組んでいます。

教授 伊東久夫

外科学第二講座 (消化器病態学)

外科学第二講座は大正15年10月1日に初代瀬尾信教授が瀬尾外科を開講した時に始まります。瀬尾教授は当時殆ど成功例のなかった食道癌の手術に果敢に挑戦し、食道外科を開拓しました。また、胃全摘後の有茎空腸間置による再建法は現在でも世界に誇る術式です。2代目中山恒明教授は昭和23年に教授に就任されました。その後の活躍ぶりは改めてここに記すまでもありませんが、食道外科を

現在の教室は平成10年10月から落合武徳が主宰しております。教室員は教授1、講師5、助手10の教員に医師、研究生、大学院生、研修医を加えた総勢約50名です。診療は食道・乳癌・胃・大腸、肝胆膵の3組体制で行っております。研究では21世紀を見据えて、癌治療と臓器移植を教室の二大テーマと致しました。教室には死体腎移植30年余の歴史がありましたが、本年3月6日には生体部分肝移植を病院全体のご協力を頂いて実施することが出来ました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。今後、精力的に肝移植医療を押し進めるとともに、小腸移植、脾移植など未開の分野にも取り組んでゆく所存です。

一方、癌治療の分野では、本年度から食道癌に対してJCOの遺伝子治療を世界に先駆けて実施すべく、鋭意準備を進めております。また、癌に対する手術は拡大郭清の歴史でしたが、根治性を損なわない低侵襲手術、具体的には消化管癌に対する鏡視下手術、リンパの流に基いたリンパ節郭清の合理化に取り組んでおります。

以上のほかに、高度先進医療として内科的治療では効果の上がらない肥満に対する外科治療(EDG-PL)による悪性病変の鑑別などにも取り組んでおります。このように、先端医療の展開を図る一方で、医師、看護婦のカンファレンスを頻繁に行い、

耳鼻咽喉科学講座 (頭頸部機能学)

耳鼻咽喉科学教室の創設は当時の千葉医学専門学校に西山信光先生が着任した1909年に遡ります。その後、教室は大平直治教授、細谷雄太教授、久保護躬教授に引き継がれ、千葉大学医学部初代教授として北村武教授が1909年に就任し、26年間に在任いたしました。

北村教授の時代には鼻科学、頭頸部腫瘍学、口腔・咽頭科学(特に唾液腺学)を中心に多くの研究業績をあげられ、その門下生である奥田稔名誉教授(和歌山医大、日本医大)、戸川清名誉教授(秋田大)、海野徳二名誉教授(旭川医大)、石川峰名誉教授(熊本大)らは日本及び世界の鼻科学、耳鼻咽喉科免疫・アレルギー学、頭頸部腫瘍学、口腔・咽頭科学の発展に大きく寄与してまいりました。1979年には金子敏郎教授が就任し、これまでの教室の研究をさらに発展させると同時に、

医療過誤のない良質な医療の提供に努めております。同窓の皆様が置かれましても第二外科に益々の御指導御鞭撻をお願い申しあげまして、教室紹介と致します。

教授 落合武徳

- 大学病院における私共の臨床についてもできるだけ幅広い専門領域を持つように努め、各スタッフ(括弧内はグループ長)は以下の専門外来を中心に高度先端医療の開発をめざして、活発な診療活動を続けております。
- 1、頭頸部腫瘍(沼田勉講師)
 - 2、免疫・アレルギー疾患(寺田修久講師)
 - 3、難聴、遺伝子異常、慢性EBウイルス感染症(永田博史講師)
 - 4、慢性副鼻腔炎(本杉英昭助手)
 - 5、めまい、平衡障害(昼間清助手)
 - 6、甲状腺、副甲状腺疾患(仲野公一助手)
 - 7、発声障害、嚥下障害(柴啓介助手)
 - 8、顔面神経麻痺(小林伸宏)
 - 9、唾液腺疾患(高橋直樹)
 - 10、味覚・嗅覚異常(内藤準哉非常勤講師)
 - 11、小児難聴(吉田耕非常勤講師)
 - 12、睡眠時呼吸障害(嶋田秋子非常勤講師)
- また、現在進行中の基礎的及び臨床的研究としては(1)鼻過敏症の病態生理、鼻粘膜過敏性の発現メカニズムの解明

(2)アレルギー性鼻炎に対する減感作療法の開発、スギ花粉症の感作、発症、自然緩解のメカニズムの解明

(3)頭頸部領域組織の微小循環動態の解析と頭頸部組織拡大切除後の形態機能の修復及びめまいの病態解明への応用

(4)頭頸部癌に対する集学療法の開発

(5)耳鼻咽喉科疾患における遺伝子異常の解析

(6)発声、嚥下運動の中枢機序の解明

(7)頭頸部癌、アレルギー性鼻炎に対する遺伝子治療の開発

遺伝子制御学講座

昨年の大学院独立専攻高次機能系の発足に伴って名称変更した「遺伝子制御」はそれまでは「遺伝子情報」あるいは略称「遺伝子」として、1990年の高次機能制御研究センターの発足に際して、新たに作られた研究室です。高次機能制御研究センターの設立趣旨でもあった、複雑な生命の高次機能分子レベルで解析することを旨とする研究として、医学部に分子生物学的なアプローチを進めて行く任務を持って発足しま

ながあり、基礎医学教室と広く連携を保ちながら、活発な研究活動を続けております。

また毎年2名前後の教職員が外国の専門施設に留学して新しい知識の吸収に努めると同時に、アジア各国の若手の耳鼻咽喉科医に教室の研究の場を解放するよう努めております。

まだまだ発展途上ではありますが、耳鼻咽喉科、頭頸部外科医療のさらなる発展を目指して努力して行きたいと思っております。

同窓会の皆様のご指導とご支援をお願い申し上げます。
教授 今野昭義

した。初代教授として、齊藤隆が1990年8月に着任しましたが、これは千葉大学医学部として初めての医学部以外の出身の教授を作り出した時でもあったわけです。この傾向は、現在当然のように、千葉大学を含めて多くの大学で広く進められており、分子レベルでの生命現象の解析という、時代の要請に沿ったものと言えると思います。

大野博司、宮武昌一郎の二人の助手が1991年から加わり、研究室としては、当時

倉庫としてのみ使用されていた医学部本館5階を徐々に改装しながら研究を開始しました。本研究室の発足と同時に、千葉大学に大学院基盤重点設備として2億5千万円の予算が獲得でき、イメージアナライザーやDNAシーケンサーなどの最先端の遺伝子解析設備が共通機器として同階に完備されることとなり、遺伝子制御学教室が管理運営を担当することになった経過から、多くの方には、私たちの研究室は、共通機器のある場所としてより親しみがあつたかも知れません。スタッフとしては、その後、1991年より助手に荒瀬尚が加わり、1997年に宮武が東京大学に転出し、同年、大野が助教授に昇任しました。その後、大野は1999年に金沢大学が研究所の教授として転出し、同年に山崎晶が助手として、更に本年、瀧伸介が助教授として加わりました。現在は、教授1、助教授1、助手2、の他にポスドク3名、大学院生11名、研究生2名、研究補助2名、秘書2名の総勢24名で構成しており、ここ数年は、だいたい総勢20人ほどの規模を常に維持してきています。この他にも常に医学部の2・4年生の興味を持った熱心な学生

が一緒に加わって日夜研究しています。発足して未だ10年余りの歴史の浅い、若い研究室ではありますが、これまで様々な臨床系講座（内科、二内科、三内科、一外科、二外科、整形外科、耳鼻科、精神科、小児科、呼吸器内科、肺外科、など）からの大学院生と共に研究する機会に恵まれました。この場を借りて、多くの優秀な大学院生と仕事ができるようにアレンジしていただいた臨床講座の先生方にお礼申し上げます。

研究内容としては、高次機能系の大きな柱のひとつである免疫系の制御機構を分子レベルで解析しております。とりわけ、齊藤が、かつてTリンパ球の抗原受容体による抗原認識機構を世界に先駆けて解明して以来、一貫してT細胞レセプター/CD3複合体の構造と機能の解析を中心とした、T細胞の抗原認識/分化/機能発現/細胞増殖・死、の制御機構を解明していま



クローニングや蛋白相互作用など分子レベル、変異遺伝子導入細胞の機能などの細胞レベル、そして、トランスジェニックマウスや遺伝子欠損マウスの作製・解析などの個体レベルでの解析まで、広い視野と範囲で行っています。千葉大医学部で最初にノックアウトマウスを樹立し、これまでに7遺伝子の欠損マウスの作製に成功し、解析してきています。疾病との関わりでも、T細胞が生体防御の中心であることから、エイズ、癌、自己免疫疾患、免疫不全症などの解析も進めています。その成果として、発足より10年間で、英文論文で全75報、Impact factorの合計約80になりました。今後とも先進医学研究の一翼として、千葉大学医学部のレベルの高いサイエンスのためにも邁進したいと考えています。

研究室運営の特徴としては、サイエンスにたずさわるとして、未熟であっても個々人をサイエンティストとして尊重するようにしています。その底流には、

サイエンスを通して真理の一端を垣間見たい、という立場においては学生も教官も同じ立場にあるのだ、という信念があります。より実際的には、大学院生の教育として以下の3つの点を重要と考えています。(1)論文を読んだり、話を聞いた中で、今何が面白くて重要なのか、を理解できるか、(2)面白いと思ったことに対してどのようにして自分自身の仮説を立てて、実際計画にまで具体化するためにどうすれば良いのか、を考えられるのか、(3)実際に種々の技術や機器を使いこなして、実験を成功させることができるのか、という点です。大学院生の中にこういうことが自然な態度として身に付くように、「人間性を尊重し、しかし、サイエンティフィックには厳しく」指導しようと考えています。

これまでのものはな同窓会のご支援、ご援助を感謝致しますと共に、今後とも宜しくお願いいたします。
(写真：平成12年3月)
教授 齊藤 隆

肺癌研究施設第一臨床研究部門（呼吸器機能学）は、香月秀雄先生を中心とした昭和34年4月に辿る事

が出来ます。昭和38年1月には18床の病床が置かれ本格的に診療が開始され、昭和53年1月現在の附属病院の開院と共に30床の病床が配分され現在にいたっております。当科は初代香月秀雄教授、山口豊教授の後、平成9年9月に私が教授に就任し教室を主宰しております。肺癌研究施設の外科部門として、呼吸器内科および病理部門との密接な関係を保ちながら、原発性肺癌を中心に呼吸器、縦隔および胸郭の外科領域疾患の診断と治療を行っております。

その予後を悪化させることなく、Quality of Life (QOL) を満たすことができるような治療法を選択するよう心がけております。肺門部早期肺癌を例に取りますと、上皮内癌など微小癌に対しても以前は手術が行われておりましたが、現在では内視鏡的レーザー治療を用いることで完治が得られるようになってまいりました。これらは中高齢者の低肺機能例が多いため治療後も肺機能が保たれ、充分なQOLが維持されております。

治療部門では、原発性肺癌においては標準術式に加え、周囲臓器を含めた拡大手術ならびに高齢者ならびに低肺機能例に対する縮小手術の適応、および中枢気道狭窄に対するステント留置術などに力を注いでおります。ステント留置術を施行することで、気道狭窄症状の強い進行癌に対するQOLは著明に改善されました。科学技術庁放射線医学研究所の重粒子治療研究班との共同研究としてフェイズI/II臨床試験が行われ、従来の放射線療法に比べ良好な結果が示されています。更に手術不能進行癌や術後再発進行癌に対しては、活性化自己NK細胞を用いた免疫療法を計画しています。また将来の肺移植の臨床応用に備え現在カナダ、トロント大学で肺移植の実地臨床研修を行っており、研究では、肺の保存と拒絶反応のモニタリングおよびその機構解析にスポットを当てています。

ならぬ社会的責務は大きいものと考えられます。少しでも肺癌死亡率を低下させるべく教員一同日夜努

救急医学講座 (臓器不全病態学)

教授 藤澤武彦

力しておりますが、今後とも先生方のご支援とご協力の程お願い申し上げます。

んでいる診療・研究のテーマは『敗血症性多臓器不全の病態の解明と治療』ということに尽きよう。複雑な病態を呈し、未だ60%近くの致死率を示す敗血症性多臓器不全の病態を解明するのは容易なことではないが、最近の分子生物学の恩恵を受けて少しずつは解明されてきている。この4月から、は大学院生も計6名となり、彼らがそれぞれ基礎医学教室と連携を保ちつつ研究を進めてくれているし、また大学院生以外の教室員の研究テーマも全て何らかの形で敗血症性多臓器不全に関連したものなので、近い将来その病態生理の解明がさらに進み、それに立脚した新しい治療法が確立され、救命率の改善に繋がるものと期待している。大学院大学へ向けての新しい講座名を「臓器不全病態学」としたのは、そのような私自身の願いを込めたものである。

も得意とする領域である。また汎発性腹膜炎や重症急性肺炎などの症例も、それらに対する新しい治療方針を採用しており、良好な成績を上げている。この原稿は同窓会報用のものであり、同窓諸兄の目に留まるわけであるが、同窓諸兄の医療機関で上記のような症例がたまたま不幸にして発症してしまつたら、是非われわれにご連絡頂き、治療に参加する機会を与えて頂きたいとお願ひいたす次第である。附属病院のICUにご連絡頂ければ、365日、24時間誰か必ず即座に応答するはずである。

当科が対象としている疾患は、原発性肺癌を中心とした腫瘍性疾患の他、気胸など嚢胞性肺疾患、胸腺腫などの縦隔腫瘍や重症筋無力症、胸膜および胸壁腫瘍、膿胸、漏斗胸、胸部外傷などその種類は多岐にわたります。手術症例は年間200例にのぼります。この様に現在では、心臓大血管、乳腺、食道を除いた全ての呼吸器、胸部疾患が対象となってきたこともあり平成12年4月より附属病院における診療科名を肺外科から呼吸器外科へと変更することになりました。われわれの治療に対するモットーは、疾病に対して画一的治療を行うのではなく、個々の患者に応じて、

研究活動を端的に述べますと、発癌、癌遺伝子、病理診断、細胞診断、免疫療法、転移機構の解明、肺移植における急性拒絶反応の解析とトランスの誘導等を従来の生化学的手法に加え分子生物的手法を用いた発展させております。診断部門では、PET-CTを用いた蛍光気管支内視鏡による肺門部早期肺癌および前癌性病変の早期局在診断を喀痰細胞診陽性例を中心に行っており、上皮内癌や多数例の前癌性病変が発見されています。異型扁平上皮化生など前癌性病変に対しては慎重な経過観察を行っており、多段階発癌の機構解明が待たれるところで

21世紀を迎え、肺癌発生率、死亡率は増加の一途をたどっており、人口動態調査によれば胃癌を抜いて悪性腫瘍死亡の最大原因疾患となりました。このような現状からも、われわれ呼吸器外科医の果たさなければ

救急医療とは何かという問い掛けは、日本救急医学会が創立されてすでに四半世紀が経過した現在においてもなされている。私は救急医療とは、急性疾患あるいは各種疾患の急性増悪に対して初期治療を行い、全身状態の安定化をはかり、その病態の本質を見極め適切な治療を行うことであるいは治療のアレンジをするこ

と、それに引き続きCICU-ICUを行うことであると認識している。その意味からも本学附属病院で行っているような救急部と集中治療部のドッキング方式による運営は、極めて合理的であるといえよう。またこれら救急医療、集中治療に対応すべくその学問的側面を取り扱い、その進歩発展に寄与するのが救急医学、集中治療学である。

救急医療や集中治療の専門医を目指して研修を続けるということは、肉体的にも時間的にもかなり負担が大きく、現在の世相を考えると入局希望者が大勢押しかけるというようなことはない。これは全国的な傾向である。そんな中で我々の教室は例年2-4名の新人医局員を迎えており、しかもその教室員が私の目からみても使命感に燃え、優秀であるという感じがしているが、このことは他の大学と比較して誇ってよい成果であると自負している。

前記したように教室員は決して多くはないが、次第に育っており、関連病院としてやっと確立してきた、君津中央病院について次の関連病院を立ち上げることになっている。その他にも救急診療部門開設の要請を多数頂いており、これらのニーズを満たすべく、立派な救急・集中治療の専門医を育成することも教室の重要な責務と認識して、教室員ともども日夜頑張っているところである。

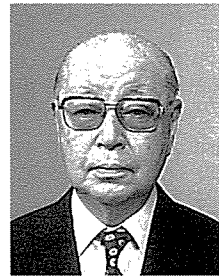
教授 平澤博之



名誉教授近況

第二の人生

松本 胖



千葉大学を退官してから早くも23年目になり、今年

は7月の誕生日が来ると90歳になる。卒寿が迎えられるかも知れないなんて全く考えたこともなかった。教授の在任期間よりも名誉教授の期間の方が長くなったが、これも長生きしているからだと感謝の気持ちいっぱい生活が続いている。

昭和51年3月に医学部は停年退官したが、その2年前から看護学部の創設を命じられていたので、これが軌道に乗るまで続けるように要請され、専任となって更に一年余り勤め、昭和52年5月末日を以て千葉大学を改めて退官した。

第二の人生への出発は一年以上遅れてしまったが、今までの経験を生かして少しでも地域医療のお手伝いしようと思われ、中村病院で外来診療に従事した。間もなく香月秀雄学長に依

頼されて、保健管理センターで学生や職員の精神面の相談を引き受けることとなり、非常勤講師として週1回勤め、十年余りを過ごした。

その際、無気力な学生が年と共に多くなり、これを放置したら将来どうなるのかと強い不安を感じるばかりでなく、家庭教育と学校教育のあり方に抜本的な改善を検討しなければならぬと痛感した。

退官したら好きなゴルフでも楽しみたいと大いに期待していたが、千葉県の公安委員会をはじめ、社会部、衛生部、教育委員会などに関係する委員会の委員を依頼されたり、団体や企業などから講演や相談や協力を依頼されたり、行事に引張り出されるなど、遂に休日もとれないほど忙しい時期さえ見られた。期待は完全に裏切られ、人生に余暇は得られないものと、あきらめるより仕方がなかった。

しかし、73歳の頃、運動すると胸部圧迫感と息切れが強くなるので、稲垣義明教授の診察を受けたところ狭心症といわれて第三内科へ5カ月間入院した。

諸先生の適切な治療によって、幸にも一命をとりとめて退院することは出来たが、余り無理はできない状態に

なったので、なるべく仕事を辞退させて頂き、やっと念願のゆつたりした日を送ることが可能となった。

ところが、2年後に71歳の妻が突然脳梗塞による左半身麻痺となって入院し、退院後も長期に亘ってリハビリテーションを受けることになってしまった。自立しての生活は不可能なので、常に介護をしなければならず、今まで経験したことのない家庭内の雑事まですることになってしまった。

病妻の介護が私のリハビリにもなると思って続けているが、年を重ねるごとに老化現象も進み、体力も衰え、疲労感も強くなり、行動範囲も極度に狭くなって、最近では次第に困難となって来た。幸にして、十年以上もわ

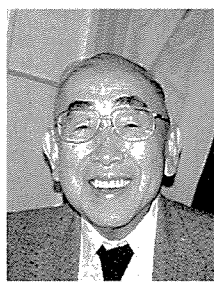
れわれの世話をしてくれるお手伝いさんに昼間だけ、時には夜も来てもらっている。日常生活にはそれ程大きな支障は感じていない。苦しい時の神頼みという言葉があるが、現在は助ける神があることを信じて生活している。

長く生きてみると、それだけ多くの体験を重ねるのは当然といえるが、最近とくに気にかかり悲しく思うのは、知人、友人など周囲の人々が次々とこの世を去っ

て行かれることである。わが同級生も僅か1割の8人になってしまった。毎年、年賀状の数が目に見えて減ってゆくの淋しくて仕方がない。現在は老妻の介護を生き甲斐に何とか暮らしているが、これをいつまで続けられるかしらという不安は毎日続いている。

40年前の話

三浦義彰



のですが、私の使っている言葉が古くなり、若い人には分からないので、若い共著者、橋本洋子君に書き直してもらいました。近況は以上ですが、これではあまりに素っ気ないので、私が最初に千葉に伺った時の思い出でいいかもしれません。

私が千葉大学にお世話になって今年で40年になりました。昭和35年の夏、医学部事務から、まだ辞令は出ていないが、教授会の懇親会が木更津で開かれるからご出席をと知らせがあり、学会で札幌にいたので、空路、木更津上空を経て羽田から東京湾を一回りしてようやく夕方その宿に着いてみると、皆様はいま一風呂あびておいでだからと、風呂場に案内されました。蒙蒙たる湯気の中ですから、誰だかわからずに、新任の三浦でござい、と裸のまま

で挨拶して回りました。やがて酒席になり、改めて銘々のお膳の前に挨拶に参りますと、「さっき風呂場で会ったじゃないか」といわれます。「いえ、先ほどは湯気でお顔が見えず、先生のご子息にだけ挨拶を申し上げました。」一回りして、自分の席に帰ってみると、大男が長々と眠っています。隣の先生が「これはグリチャ

んという先生で、芸者さんと踊っているうちに、眠ってしまったよ。いつもの事だね。」といわれました。こんな風にして、私の千葉大学での生活が始まりました。在任中、チフス菌事件、診断書事件、学生のスと決して無事平穏な毎日ではありませんでした。昭和56年に退官するまで、皆様のご懇情のお陰で大過なきを得ました。有り難うございました。

論文審査の光と影

本田良行



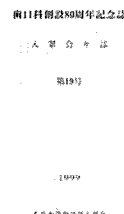
昨年、年末に集中して三編の論文の査読を依頼された。退官後、頭の方も大分退行性変化を起こしているように感じていることと、脳の活性化を目指して有り難く読ませて戴いた。

第一の論文は低酸素に対する換気応答の順化に関する論文であった。ラットで動・静脈シャントを作り連続的に血液ガスをモニターする手法が抜群で、論文の考察も立派で気持ちよく良い評価をする事が出来た。

第二は動脈血の酸素濃度を無侵襲的に連続測定するパルス・オキシメータの進歩の歴史を回顧した総説である。パルス・オキシメータについては、以前に亥鼻図書館の館報「ういぶらり」の「のはな」にも紹介したことがある。この革命的な装置を世界最初に作ったのは日本光電社の青柳卓雄博士である。この報告は1974年に抄録が、1976年にフル・ペーパーが何れも世界に先駆けて日本文で発表された。これを取り上げて世界に紹介し、青柳博士の名前を不動のものとしたのは、UCSFの麻酔学教授で血液ガスに関する世界的権威のセベリング博士である。しかし、この度査読を依頼された論文には上述の2つの論文は引用されていなかった。日本人の仕事のプライオリティを尊重すべきではないか、特に歴史的な発展の経過を回顧するというのなら、この視点が重要であろうと著者に指摘した。

第三の論文は老人ホームに収容されている多数の患者についての研究報告であった。この患者群での一つの特徴は血液の炭酸ガス圧が正常健康人より2〜3倍もの範囲にわたってバラバラに分散していた。しかし、

同門誌紹介

歯科口腔外科学講座
同門誌

名称 入翠会々誌

歴史 歯科口腔外科学講座の同門会は入翠会(にっすいかい)といい、歯口科創設当時活躍された入戸野賢二先生と松本清次郎先生の名前(入戸野先生の「入」と松本先生の松の「翠」をとって命名された。同門会誌である入翠会々誌は1941年第1号が創刊され、以後約2年に1回発刊を続けている。毎号会員より機知に富み、また思い出で深い記事が寄せられ、その時々を彷彿させる内容となっている。1999年第19号が発刊され、2000年には第20号の発刊が予定されている。

内容

- 1、巻頭言
- 2、入翠会総会記事
- 3、学苑 臨床研究、学会報告
- 4、寄稿 随想、会員近況報告等
- 5、教室関係記事 教室活動状況、関連病院紹介、

新入医局員紹介

6、教室業績 論文、著書
学会発表

7、入翠会会員名簿

入手方法 千葉大学医学部
附属病院歯科口腔外科臨床
研究室(内線6222)

泌尿器科同門誌



名称 千葉大学泌尿器科同門会誌

歴史 泌尿器科学教室がそれまでの皮膚泌尿器科学教室から分離した昭和35年より、泌尿器科教室年報として昭和49年まで出版されていた。以後休刊していたが、平成9年より再び年1回出版されるようになった。

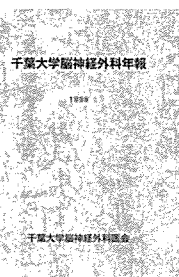
内容

- (1)千葉大学医学部泌尿器科同門会員名簿
- (2)千葉大学医学部泌尿器科関連施設現況報告
- (3)千葉大学医学部泌尿器科同門会員現況報告
- (4)医局現況報告
- (5)各年度新入医局員紹介
- (6)各年度教室行事報告
- (7)泌尿器科疾患治療方針
- (8)集合写真、スナップ
- (9)その他(序文、編集後記、

お知らせなど

入手方法 千葉大学医学部
泌尿器科医局秘書までご連絡下さい。

脳神経外科同門誌



名称 千葉大学脳神経外科年報

歴史 平成5年4月に千葉大学脳神経外科年報1991-1992合併号が出版され、以後毎年出版されている。現在まで(1999年号まで)計7号が出版された。現在1999年号が製本中である。

内容

- (1)千葉大学脳神経外科医学会員名簿
- (2)千葉大学医学部脳神経外科関連病院統計
- (3)千葉大学脳神経外科医学会員業績(論文、著書、学会発表) 一覧
- (4)各年度新入医局員紹介
- (5)大学医局現況報告
- (6)関連施設現況報告、回顧録など
- (7)年一回施行される、千葉大学脳神経外科医会における集合写真
- (8)その他(序文、編集後記、

入手方法 千葉大学医学部

脳神経外科医局秘書までご連絡して下さい。
(内線500)

第2外科同門会誌



名称 千葉大学第二外科同門会誌

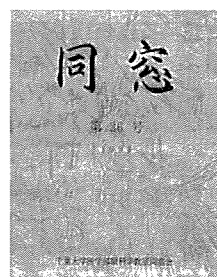
歴史 昭和39年10月に同門会が発足し、昭和40年12月に同門会誌第1号が発刊された。年に2回発刊されていたが、現在は年報として年1回の発刊となっている。

内容

- (1)巻頭言・教授
- (2)同門会長挨拶
- (3)教授、病院長就任挨拶
- (4)学会、研究会報告
- (5)寄稿文(外科医30年)
- (6)海外留学便り
- (7)新入医局員自己紹介
- (8)教室年間行事
- (9)大学、関連施設手術症例数
- (10)教室、関連施設業績
- (11)その他、特別記事

千葉大学眼科学教室
同門誌

同窓



名称 同窓

毎年12月に行われる千葉大学眼科学教室同窓会総会に合わせ年一度発行されている。昭和37年創刊され、平成11年で第36号を迎えた。装丁 毎年表紙の色が変わり、その選定は、その年の同窓編集委員が決定する。

内容

- (1)千葉大学眼科学教室同窓会会長(教授)の巻頭言
- (2)千葉大学眼科学教室同窓会会員近況報告
- (3)物故会員に対する追悼文
- (4)大学医局現況報告
- (5)大学院研究報告
- (6)新入医局員紹介
- (7)千葉大学眼科関連病院近況
- (8)千葉大学眼科学教室業績(学会発表、論文)
- (9)千葉大学眼科学教室同窓会会員名簿
- (10)その他(編集後記、同窓コンペ結果など)

るのはな同窓会支部の会報等刊行物をご希望の方にお分
け致します。各支部へお申し込み下さい。
神奈川のはな会
〒236-0002
横浜市金沢区泥亀2-18-3 金澤病院内
神奈川のはな会事務局
Tel/Fax 045-786-8668
(送料込み一部500円)

静岡のはな会

〒433-8558
浜松市三方原町3453 聖隷三方原病院
宮本恒彦
Tel 053-436-1251

九州のはな会

〒830-0047
久留米市津福本町67-4
谷川久一(九州のはな会会長)
Tel/Fax 0942-321-3858

東京のはな会の刊行物についてはのはな同窓会事務
室にお問い合わせ下さい。

社会医学実習

「女性医師の結婚観」

調査グループより

昨年10月、右記のテーマで調査を行うため結婚観について
のアンケートを女性医師の方々に送らせていただきました。
調査結果は本年3月31日に行われた社会医学実習発表
会におきまして、発表させていただきました。現在(4月10日)
発表会での討論を踏まえながら、報告書を作成中です。
ご協力下さった女性医師の皆様には、心から感謝を申し
上げます。

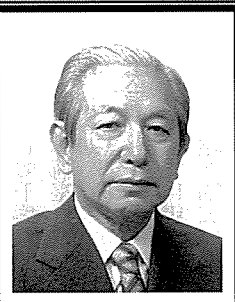
アンケートをご返送いただいた方の中で、分析結果を知
らせてほしいというご意見を多く寄せていただきましたが、
無記名式アンケートでしたので結果をお知らせすることが
出来ません。

もし、ご関心をもちました方がいらっしゃいましたら、
報告書のコピーを送らせて頂きますので、お手数ですが、
衛生学教室(電話番号043-1226-2065、大学内
線5193)までお問い合わせください。
最後になりましたが、のはな同窓会の事務局の方々に
も、深く御礼申し上げます。(代表 田島敏樹 5年)

千葉大学名誉教授

故相磯和嘉先生を偲んで

新井 正(昭21)



千葉大学名誉教授 相磯和嘉先生は、平成12年1月15日14時10分肺炎のため自宅で逝去されました。享年90才でした。

先生は明治42年静岡県に生まれ、旧制広島高等学校理科甲類を経て昭和11年千葉医科大学を卒業されました。直ちに千葉医科大学第二外科教室助手として外科学を専攻された後、千葉医科大学衛生学教室の松村晝教授の教室に入られました。これが先生の食品衛生学者としての出発でありました。その後千葉医科大学(後に千葉大学) 腐敗研究所長、千葉大学医学部長などの要職を歴任され、昭和45年千葉大学長に就任、同年51年退任され千葉大学名誉教授の称号を受けられるまで、永年我が国の教育、研究の発展に尽力されました。先生の公職に伴う御活躍

は極めて多岐にわたるものですが、ここでは従来の追悼文といささか趣きを異にしますが、主として先生と千葉大学腐敗研究所との関わりにおいて先生の足跡を辿りたいと思います。

先生は戦後始めて千葉医科大学に設置された腐敗研究所の実質的な創始者であります。時に敗戦直後の昭和21年9月のことでありました。

腐敗研究所は、その名称は奇抜でユニークでありましたが、この研究所で行われた研究は常に時代を先取りした出色のものであり、著名な研究者を有し、また養成し、内外の注目を集めたものでした。

その発端は、昭和14年浜名湖のアサリ中毒事件であります。この食中毒は今でも食品衛生学の教科書には必ずでておりますが、このアサリを食した者は、血を吐き腸出血を起こして悲惨な死をとげたものでした。相磯先生は当時助教授でありましたが、その原因の究明に現地に赴きました。先生は試料として入手したアサリの身を培地に入れ、好

気性と嫌気性で培養したところ、その中に1ヶ月たっても2ヶ月たっても、アサリに変化が来なく、又腐敗しないものが有ったのです。これから嫌気培養したところ出現したのが後に抗腐敗性酪酸菌と称され腐敗研究所創始のきっかけとなったバクテリアでした。相磯先生の発見したこの菌を戦時中、前戦の将兵の食糧の保存に役立てようとの企てが始まりました。

そのころ陸軍軍医学校の稲垣克彦少佐は、この研究を国の最重要研究課題の一つにとり上げましたが、同少佐は同時に「碧素」と呼ばれていたペニシリンの実用化をわが国の微生物学者を動員して主導したことで有名であります。ペニシリンはフレミングの知見に基づく研究の成果でありましたが、相磯先生の発見はペニシリンや抗生物質の概念に先駆け、しかも他に例をみない新規なもので特筆すべきものであります。

戦後の食糧窮乏という社会情勢があり、また敗戦後の科学振興に対する熱意が実り、理学、農業分野に加えて、医学分野から国内に三ヶ所の研究所が設けられました。腐敗研究所はこの医学分野から選ばれたものでした。

このようにして習志野の旧陸軍習志野学校跡地内の毒ガス研究棟を使用する腐敗研究所が誕生しました。相磯先生は、腐敗研究部門を、また当時の附属薬学専門学校から転じた、故宮木高明教授(後の日本薬学会会頭)が微生物化学部門を主宰することになりました。先生は、たまたま、研究のお手伝いに応募した私を含む3名の学生を率いて習志野に泊まり込みで文字通り、月火水木金金の奮闘を開始されました。

先生のライフワークは食品微生物と食品腐敗の研究であり、わが国独特の食品別の腐敗とマイクロフローの業績は他に類例をみない貴重なものであります。また食中毒の研究は先生が最も力を注がれたものでした。食中毒、いわゆる「食当たり」の原因は腐敗した食品中に生ずるプトマインという毒性アミンであるという古くからの通説がありましたが、先生はサンマ桜干中毒から分離したプロテウス・モルガニ菌が多量のヒスタミンを生成し、このヒスタミンが本中毒の原因物質であること、ヒスタミンは「光りもの」と呼ばれる赤身の魚肉に限られて存在

するヒスチジンから生成されることを発見されましたが、これは食中毒の科学的解明の第一歩として歴史に残るものです。

腸炎ビブリオ食中毒は刺身など魚を生食するわが国独特の細菌性食中毒として有名なものです。好塩菌という特殊な菌群に属するその原因菌の発見と病原性究明に多大の貢献をされました。

アフラトキシンはピーナツなどを汚染する「かび」のつくる発癌性物質であることは今日誰でも知っていますが、この真菌毒素の基礎的研究をいち早く取上げ、その侵入を水際で食い止めることに成功しているのは腐敗研究所の研究グループのお陰であります。さらに食品保存料として重要なソルビン酸やデヒドロ酢酸などは腐敗研究所の評価を経て世に送り出されたものでした。

先生は学会における研究分野も幅広く日本衛生学会、日本公衆衛生学会、日本食品微生物学会など多数の学会の重鎮として後進の育成に当たられました。先生の著書も食品微生物学、食品微生物、食品微生物事典など多数あります。

先生は永年にわたるこれ

らのご功績に対し昭和56年4月、勲二等旭日重光章が授与されました。

相磯先生は科学者であると同時に文人でもあり、「欠如と花々」「抑制の原理」をはじめ数々の随筆集、歌集も出版されておられます。先生は時にかつての外科医の風貌をかい間見る厳しい面もありましたが、お若い頃は教室員と野球にも興じられる磊落な面もお持ちでした。人を暖かく包容する心の広さが、先生の常なる管理職として求められた所以であります。

われわれの心の支えとなつたあの端正な温顔にももはや接することができなくなつたことは痛恨の極みであります。

謹んで、ご冥福をお祈り申し上げます。

お知らせ
るの は な 同 窓 会 事務局では、卒業年次別クラス名簿リスト、地域別会員リストおよび郵送用住所ラベルをご希望により作成いたします。詳細は同窓会事務局にお問い合わせ下さい。

おくやみ

- | | |
|--------------|-------------|
| 山崎 一雄(新専大13) | 近藤利器男(昭19) |
| 富金原 茂(昭9) | 西沢 重男(昭20) |
| 相磯 和嘉(昭11) | 小西 義男(昭23) |
| 村尾 正(昭14) | 宮本 虎弘(専23) |
| 鈴木 元一(昭15) | 河野 和夫(専25) |
| 阿部 正武(昭16) | 東 英二(専26) |
| 岩佐 正三(専17) | 佐々木育三(群昭27) |
| 須田 泰之(専17) | 植田 尚男(昭28) |
| 板井 忠生(日大昭18) | 松野 仁(昭30) |

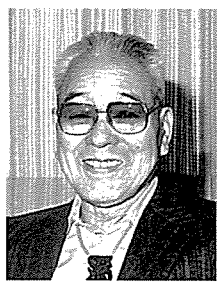
発行の御案内

千葉大学医学部同窓会名簿(二〇〇〇年版)
新名簿が平成11年11月発行されました。価格は送料込みで3千円です。ご希望の方は、同窓会事務局にお申し込み下さい。なお、既に御購入済みの名簿に乱丁がございましたら御連絡下さい。新しい名簿を送致します。

千葉大学名誉教授

故久保政次先生を偲んで

河野陽一(昭48)



千葉大学名誉教授、久保政次先生は平成12年1月8日肺炎のためご逝去されました。行年87歳でした。

先生は、明治45年2月25日千葉県にお生まれになり、昭和13年3月千葉医科大学を卒業後小児科学教室に入局されました。千葉医科大学副手、助手、講師、助教を経て、昭和26年4月東邦医科大学教授、昭和30年4月東邦大学医学部教授となられました。その後、昭和38年7月に佐々木哲丸教授の後任として千葉大学医学部小児科学講座の教授に就任され、以来昭和52年に千葉大学教授を停年により退官されるまで14年にわたり、深い学識と幅広い経験のもとに診療そして医学教育、研究の充実に力を尽くされました。またその間、千葉大学医学部附属看護学校長、同助産婦学校長、昭

和50年4月より2年間千葉大学医学部附属病院院長を勤められるなど大学の発展にご尽力され、昭和61年10月に千葉大学名誉教授の称号を授与されておられます。また先生は、千葉大学退職後は、千葉市医療顧問、千葉市立海浜病院院長に就任され、千葉市の地域医療の発展・充実にご尽力されておられます。これらの業績により昭和59年には、勲三等旭日中綬章を受章されました。

先生は、昭和63年から6年間医学部附属肺病研究施設長を併任、平成9年に停年退官されるまで20年の永きに亘り、呼吸器外科科学の教育ならびに研究に従事するとともに、千葉大学医学部附属病院肺外科科長として日常診療にあたられました。退官後、千葉大学名誉教授になられました。

この間、幅広く学術活動に参画され、日本胸病外科学会、日本呼吸器外科学会、日本気管支学会、日本臨床細胞学会、日本肺癌学会、日本呼吸器学会の各会長を歴任、我が国の呼吸器外科科学の発展、学問の向上のために尽力されました。さらに、厚生省抗悪性腫瘍剤調査会委員、重粒子線治療ネットワーキング会議委員、同計画部会胸部分科会長、重粒子線がん治療肺腫瘍臨床研究班長を歴任し、医療行政に

境因子の役割にも関心を向けられ、昭和49年の公害健康被害補償法の施行に際しての指定地域、及び補償対象疾患の決定などの環境行政にも多くの役割を果たしました。

先生の学会活動は幅広く、日本小児科学会の理事、評議員、日本アレルギー学会の評議員として永年に亘って学会運営に貢献するとともに自らは第78回日本小児科学会総会々頭(昭和50年千葉県で開催)として活躍し、学会の発展、学問の向上に寄与されました。また、学会外の活動も幅広く、厚生省医師国家試験審議会委員、環境庁中央公害対策審議会専門委員等多くの各種委員を歴任し、行政面にも大いに寄与されました。

先生は、喘息の患者が入院されると、喘息発作が増悪しやすい深夜に患者の呼吸状態を観察されるなど、臨床に鋭い目を向けられ、現在の日本における喘息の診断そして治療の基盤を確立されました。当時、喘息治療に携わった千葉そして全国の若い小児科医は、久保先生の論文を読み将来の新しい治療法の確立を目指したと聞いております。このように久保先生は、きわめて大きな財産を、私たち

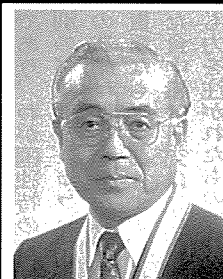
千葉大学小児科学教室のみならず、全国の小児医療を志した医師達に残されました。

千葉大学小児科学教室のみならず、全国の小児医療を志した医師達に残されました。

千葉大学小児科学教室のみならず、全国の小児医療を志した医師達に残されました。

故山口豊先生を悼む

藤澤武彦(昭42)



山口豊先生には平成11年10月4日午前5時55分、千葉大学医学部附属病院にて胃癌のため67歳の生涯を閉じられました。

先生は昭和6年長野県諏訪市御出身で、昭和31年千葉大学医学部卒業後、千葉大学医学部第一外科に入局されました。昭和34年、のちに千葉大学学長を勤められた故香月秀雄教授のもとに千葉大学肺病研究施設創設に伴い転出され、昭和42年に講師、昭和49年には助教、昭和52年香月教授の後任として教授に御就任されました。

先生は昭和6年長野県諏訪市御出身で、昭和31年千葉大学医学部卒業後、千葉大学医学部第一外科に入局されました。昭和34年、のちに千葉大学学長を勤められた故香月秀雄教授のもとに千葉大学肺病研究施設創設に伴い転出され、昭和42年に講師、昭和49年には助教、昭和52年香月教授の後任として教授に御就任されました。

力を注がれるとともに、千葉県がん対策審議会専門委員、千葉県成人病検診管理指導協議会肺病部会部会長、千葉県公立学校職員健康審査会委員、千葉市健康増進センター・コミュニケーション・運営委員、千葉市地域保健医療協議会委員及び千葉県がん緩和ケアのあり方検討委員・千葉県医師会副会長等を務め、地域医療の発展・向上にも貢献されました。

研究業績は、呼吸器外科科学全般にわたり数多く、常に先端技術の導入に積極的で、呼吸器外科領域に応用してられました。特筆すべき研究業績は、ヌードマウス皮下移植ラット気管を用いたヒト正常気管上皮細胞の発癌過程及び肺癌細胞の浸潤・増殖能の研究、肺癌所屬リンパ節の免疫学的解析、肺癌切除例に対する「AK細胞による術後合併療法に関する研究、神経内科学教室との共同による重症筋無力症に対するプレドニゾン隔日大量投与併用胸腺摘除療法に関する研究、気管支肺胞洗浄液中リンパ球による移植肺の特異的拒絶反応の検出に関する実験的研究、中枢気道狭窄に対する内視鏡的レーザー治療に関する研究等が挙げられます。

研究業績は、呼吸器外科科学全般にわたり数多く、常に先端技術の導入に積極的で、呼吸器外科領域に応用してられました。特筆すべき研究業績は、ヌードマウス皮下移植ラット気管を用いたヒト正常気管上皮細胞の発癌過程及び肺癌細胞の浸潤・増殖能の研究、肺癌所屬リンパ節の免疫学的解析、肺癌切除例に対する「AK細胞による術後合併療法に関する研究、神経内科学教室との共同による重症筋無力症に対するプレドニゾン隔日大量投与併用胸腺摘除療法に関する研究、気管支肺胞洗浄液中リンパ球による移植肺の特異的拒絶反応の検出に関する実験的研究、中枢気道狭窄に対する内視鏡的レーザー治療に関する研究等が挙げられます。

研究業績は、呼吸器外科科学全般にわたり数多く、常に先端技術の導入に積極的で、呼吸器外科領域に応用してられました。特筆すべき研究業績は、ヌードマウス皮下移植ラット気管を用いたヒト正常気管上皮細胞の発癌過程及び肺癌細胞の浸潤・増殖能の研究、肺癌所屬リンパ節の免疫学的解析、肺癌切除例に対する「AK細胞による術後合併療法に関する研究、神経内科学教室との共同による重症筋無力症に対するプレドニゾン隔日大量投与併用胸腺摘除療法に関する研究、気管支肺胞洗浄液中リンパ球による移植肺の特異的拒絶反応の検出に関する実験的研究、中枢気道狭窄に対する内視鏡的レーザー治療に関する研究等が挙げられます。

ですが、これらは国内のみならず諸外国においても高い評価を受けております。また昨今の、肺癌の著しい増加に伴い、肺癌検診の普及とともに肺癌の早期発見に心を砕かれ、肺癌の術前内視鏡診断率も著しく向上させました。また個々の症例に応じた手術式の選択により、術後の再発抑止と患者のクオリティオブライフの向上に努めておられました。



教育面では、温厚篤実な人柄と懇切な指導は、多くの学生や後進に多大な感化を及ぼし、多くの優秀な人材を世に輩出しております。このような先生の御功績ならびに御功勞に対し、正四位に叙位、勲三等旭日中綬章が授与されました。一昨年6月、病の床にふされ1年あまりの御闘病生活でしたが、一旦は日常公務に戻られ安堵しておりましたが、再発転移という病勢には抗しきれず、御他界されました。先生の在りし日の面影を偲びつつ、慎んで哀悼の意を表し、衷心より御冥福をお祈りいたします。

各地るのほな会 だより

北陸るのほな会便り
寺澤捷年(昭45) 医学部長
就任祝賀会

平成11年11月1日付けで富山医科薬科大学医学部和漢診療学講座寺澤捷年(昭45)教授が同大医学部長にご就任され、これをお祝いする会が12月9日に富山市の奥田屋にて開催されました。出席者は8名。会前は医学部部長の辻陽雄(昭33)名誉教授の祝辞と磯村勝美(昭43)先生の乾杯にて始められました。

寺澤新医学部長は、大学



教授より一代おいて引き継がれた形となったように、次々に重職に選任されていくことは当地においても稀有なことであり、千葉大学医学部がいかに多くの優秀な人材を輩出している証左といえましょう。写真は前列左

教育界をめぐる甚だ厳しい情勢と、本学が生き残るためには「個性」が不可欠であり、建学の理念である「東西両医学の融合」に立ち返ることの重要性を話された。氏のような若い医学部長が選ばれた事自体が本学の改革のあらわれであるとの声もあがり、参加者は皆新鮮な息吹を覚えました。会は参加者の近況報告、記念品の贈呈など、なごやかに進み、星山圭紘(昭44)先生の万歳三唱で散会となりました。

ここ富山医科薬科大学では本学出身者は少数派であるにもかかわらず、副学長(兼病院長)は片山喬(昭30)先生であり、また医学部長は辻陽雄(昭33)名誉

から辻、寺澤、磯村、布施秀樹(昭51)、本田徹(昭50)、星山、山田均(昭48)、伊藤隆(昭56)。(伊藤隆・昭56)

東京るのほな会

東京るのほな会 新年会

平成12年1月26日東京るのほな会の新年会が恒例により目白、椿山荘に於いて午後2時より開かれた。今回はたまたま他の会合と重なり50名弱という出席で淋しさを禁じ得なかった。

来賓として本部より全国るのほな会会長井出源四郎先生、全国るのほな会参与萩原彌四郎先生、るのほな会報編集委員長千葉大学教授鈴木信夫先生の御出席を



教授より一代おいて引き継がれた形となったように、次々に重職に選任されていくことは当地においても稀有なことであり、千葉大学医学部がいかに多くの優秀な人材を輩出している証左といえましょう。写真は前列左

賜り、また群馬県からは群馬県るのほな会会長沖眞澄(昭22)先生、埼玉県からは埼玉県るのほな会会長井上幸万(昭27)先生の御出席を頂き花を添えることが出来ました。

新年会としては小幡裕(昭28)副会長の開会の辞に次いで、貫洞一夫(昭22)先生の御挨拶があった。大塚会長から始まる歴代会長による会の発展、特に近年とみに増加している勤務医の部会の発足、病診連携への取り組み等の話に及んだ。次で会務の中間報告として総務については小川源太郎(昭27)先生、広報活動については小杉秀雄(昭24)先生、村瀬靖(昭30)先生、経理については赤畑正光(昭24)先生、勤務医部会については浜野恭一(昭33)先生から夫々活動の報告があった。長沢仁一(昭24)副会長から閉会の辞があり会は終了した。室を変え懇親の会に移った。高い木立からのこぼれ日を受け華麗な



“それいゆ”の間で行われた。小杉先生、新田義朗(昭38)先生の司会で始められ最初に井出源四郎会長の雄弁な御挨拶があった。鈴木信夫(昭47)先生も登壇されるるのほな会報の充実と将来への発展の抱負が語られた。ここで井出会長の御発声で一同元氣よく会の発展と会員の健勝を祈念し



群馬るのほな会
るのほな会群馬支部総会を平成11年11月27日、前橋市内のマリーキュリーホテルで開催しました。現在会員は62名ですが、16名が参加しました。

乾杯が行われた。この会に初めて御出席された昭和16年卒の永井友二郎先生の御挨拶があった。先生は「実地医家のための会」の創始者であるが、先生の太平洋戦争に於ける海軍軍医として従軍された生々しいお話は会員に多くの感銘を与えた。司会者より萩原彌四郎先生が平成11年秋勲二等瑞宝章を叙勲されたことの御披露があり先生の御挨拶があった。各方面で御活躍の会員からの御挨拶があり宴も酣であった。最後に



まず、本年度に逝去された、亀井清安(昭10)、野澤嘉博(昭11)、赤松弘光(昭19)、藤塚次雄(昭24)の4先生に黙祷を捧げました。沖眞澄(昭22)会長の挨拶と会務・会計報告があり、監査の赤松先生逝去と橋本五郎(昭18)先生療養中の為監査に山口隆久(昭25)、長谷川透(昭29)両先生が推挙され、承認された。また役員の任期を3年にすることと会員名簿の更新作成が決議された。前橋で婦人科を開業されていた井上理(昭24)先生が廃業し、逗子に転居されたことでした。次に「るのほな同窓会のあゆみと展望」と題し井出源四郎全国るのほな会会長の御講演があり、学外の研究にも助成をすること、学生達に教科書代を寄附すること、また大学の近況や、医学部の将来は誠に厳しい

状況にあることなど長時間に亘り詳細にお話して下さいました。

続いて田中敬明(昭16)先生の御発声で懇親会に移り、参加者一人一人自己紹介と近況報告をし、先輩諸先生の懐古談を聴くことが出来、大変楽しく有意義なひとときを過ごしました。井出先生には日中友好病院創設の頃、中国側役人との交渉に杜甫の詩を書



き示して、円満に解決したことなどユーモアたっぷりに話され、機智に富んだ話術や和歌、漢詩に対する造詣の深さには一同感服いたしました。閉会の挨拶を平形義人(昭19)先生にお願いし、一同次回の再会を約束して散会しました。出席者は田中敬明(昭16)平形義人(昭19)糸井猛彦(昭22)沖真澄(昭22)山口隆久(昭25)大塚功(昭27)

長谷川透(昭29)鹿山徳男(昭29)西村忠雄(昭32)中田益允(昭35)黒岩瑠光(昭37)本島悌司(昭45)竹内英世(昭46)小林道生(昭48)小林けい子(昭50)中嶋透(昭56)でした。(西村忠雄・昭32)

クラス会

卒業四十周年 三五会(昭35卒)

毎年行われているクラス会は、今年は千葉在住の会員が幹事となり、るのな同窓会より井出源四郎会長をお招きして、平成12年3月5日千葉市幕張のホテルニューオータニで開催した。



四三クラス会 (昭43卒)

秀一、宇田川敏二、内西兼一郎、大井利夫、海保允、神田敬、北方勇輔、成田静子、小山明、佐久間映夫、佐藤研一、佐藤重明、阪信、榎原秀三貞永嘉久、嶋田裕谷嶋つね、千野宗之進、徳江幾郎、館野翠、永田龍司、野口力、野口愼、長谷川雅朗、長谷川鎮雄、藤村真示、堀江武、増田善昭、三橋稔、山崎英雄、合計31名(嶋田 裕)

私達、昭和43年卒業生クラス会(よんさんクラス会)は卒業後9年目(1979年)に第1回を開催して以来、今回で第10回を迎えました。特に卒業20年、30年の節目に当たる1989年、1999年には恩師の先生方大勢にご出席をいただき盛大に開催し、同時に記念誌の発行も行いました。今回のクラス会では「卒業30年記念誌」の発行を記念して、平成11年11月23日東京駅に隣接したホテル国際観光にて開催されました。この「卒業30年記念誌」は初めての試みとしてCD-ROMを付録とし、これには記念誌の内容のほか激動の時代であった30年前の卒業アルバムや文集も取り入れ、クラス会の記録としては充実したものとなりました。

さて当日は、亡くなった恩師とこの年9月に逝去された小林厚夫君を含め故人となられた4名の級友に対しての黙禱に続き、出席者29名の近況報告、記念誌を中心としての歓談、CD-ROMの取扱説明などで予定された2時間半は瞬く間に経過し、次回は沖縄で開催しようとして散会。その後有志により二次会が開催されました。

出席者 青木靖雄、飯田秀治、一瀬正治、海野健、鹿島孝、唐沢祥人、川村功、神田健郎、北原宏、久野宗寛、神津玲子、國保能彦、小山哲夫、佐藤英樹、宿谷正毅、鈴木昭一、鈴木秀、蘭部友良、高山直秀、千葉彌幸、中村宏、長谷川洋機、藤塚万里子、藤塚光慶、古山信明、星野聰、松清央、盛克己、和田源司(千葉彌幸)

第94回 医師国家試験成績

試験日 平成12年3月18日(土) 及び19日(日)
合格発表 平成12年4月20日(木)

受験者 112
合格者 90 合格率 80.4%
参考

国立
合格者 3782 合格率 82.4%
全国
合格者 7065 合格率 79.1%



病院紹介

成田赤十字病院の歴史と現況

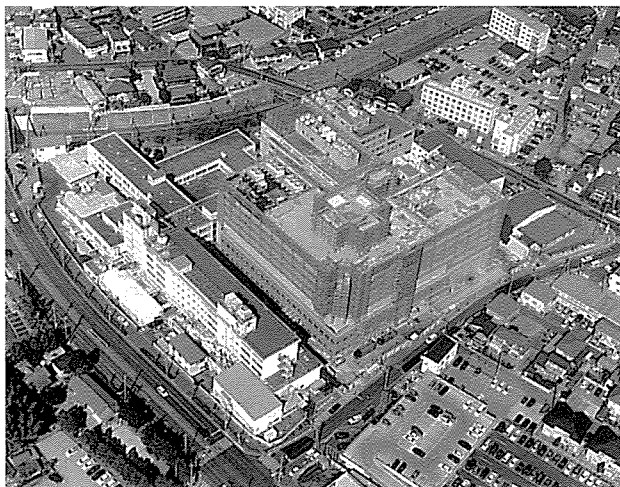
顧問 奥井勝二(元千葉大学医学部 第一外科教授・昭28)

成田赤十字病院(院長加藤誠・昭47卒)は創立50有余年を経過し、現在新病院を建築中であり、平成12年度中には完成し、近代化に向かって千葉東北総地区の中核病院として機能している。このときに当たり、同病院の創立の経緯、発展のために努力された多くの先輩の足跡を辿ることは意義あることと思われる。



発足の経緯は昭和20年終戦を迎え、医療の貧困は大きく、戦地から引き上げてきた医師の職場もない状況であった。当時の千葉県医師会の指導的立場にあった花岡和夫、川名正義先生等の指導・努力によって同年12月日本医療団成田地方病院が開院した。同院は戦時中、成田山新勝寺の前にあった蓬莱閣というホテルが霞ヶ浦海軍病院分院として存在していた建物を終戦後医療団に引き継がれて、高橋

初代院長 高橋信美先生 昭和26年現在、飯田町土地9千坪を取得して移転した。高橋院長は



建設中の病院、写真左の現在のA棟は毀され、駐車場になる

朽化している。新病院の建築中である。現在のA棟は毀され、国道51(写真)号から成田ニュータウンに通ずる道路になる。新病院の規模は地下1階、地上8階病床数71床になる。

昭和33年2月24日死亡されたが、それ迄院長として勤務され、当時の国鉄を利用して通勤されているお姿を千葉駅でお見かけしたこともある。その後二代目院長として渡辺進(昭5・第一外科出身)が足尾通洞病院から赴任し、病院の近代化に努力し、河合直次先生、佐々木哲丸先生、伊藤健次郎先生、米沢利英先生も千葉大学医学部教授定年後顧問として尽力頂いた。現在三方淳男先生も中検病理部長として勤務されている。その後、院長として田沢敏夫(昭24年・第一外科)、横田仁(昭27・第二内科)、福本泰彦(昭31・小児科)が就任し、現院長は加藤誠

(昭47・脳外科)である。病院の現況は病床数656床(一般600、精神50、感染6)、診療科は内科、外科、整形外科、産婦人科、小児科等16科、職員数817名の大世帯で、外来患者1日平均1000名、入院患者580名、救急患者も多く、総数年間2万8千人余に及んでいる。本院の特性は三次救急病院、臨床研修病院であり、成田空港の近隣にあり人口急増地帯で、空港関係者、外国の旅客者の受診も多く、航空機事故が起こった場合の対策も日頃から講じている。

最後に病院発展に努力された医師の一部を列挙する。内科・三宅一郎、山城一郎、外科・渋谷陸雄、上野仁、山中義秀、整形外科・富田裕、黒岩璋光、産婦人科・

平成12年度 医学部入学者氏名

大村 拓(山形)	大山 広(東京)	左 勝則(東京)
松本 晴樹(宮城)	岡田 広(東京)	日比谷孝志(東京)
岩井 雄太(茨城)	神谷光史郎(東京)	藤田 哲雄(東京)
金枝 朋宜(茨城)	國松加奈子(東京)	藤野 真史(東京)
木村 敦史(群馬)	近藤 孝行(東京)	堀江 勇一(東京)
佐藤 光則(埼玉)	櫻井 利興(東京)	松尾 薫(東京)
関根 香織(埼玉)	佐藤 貴史(東京)	丸山 哲郎(東京)
青木 康大(千葉)	城野 文武(東京)	南 惠理(東京)
内山 貴史(千葉)	杉本あずさ(東京)	安原 一夫(東京)
野口 直子(千葉)	関 絵美理(東京)	山本 陽平(東京)
加藤 真優(千葉)	千田 貴志(東京)	横川 涼(東京)
金井 慎一(千葉)	孫 慶淑(東京)	米川 聡子(東京)
木下 崇(千葉)	高市 麻貴(東京)	渡邊 善寛(東京)
田中 繁(千葉)	高木 馨(東京)	漆原 崇司(神奈川)
増田 涉(千葉)	高橋 淳(東京)	大田 光俊(神奈川)
山田 洋輔(千葉)	高本真己子(東京)	岡田 二葉(神奈川)
横沢 純子(千葉)	竹下 修由(東京)	岡村 明彦(神奈川)
赤澤 政信(東京)	田島 泰(東京)	北村 孝夫(神奈川)
秋山 類(東京)	田所 重紀(東京)	多羅尾健太郎(神奈川)
雨宮めぐみ(東京)	東條健太郎(東京)	野村 亮太(神奈川)
飯沼 智久(東京)	栃本 透(東京)	濱野 剛(神奈川)
井口真紀子(東京)	鳥羽 梓弓(東京)	三科 圭(神奈川)
石垣 達也(東京)	中台 英里(東京)	望月 崇紘(神奈川)
今西有章子(東京)	中村 美希(東京)	安田 玲奈(神奈川)
上田 景子(東京)	永井 勝也(東京)	吉村 健佑(神奈川)
内海 孝信(東京)	枝窪 俊輔(東京)	笠井 大(山梨)
枝窪 俊輔(東京)	大久保綾子(東京)	沢登 健治(山梨)
大久保綾子(東京)	大橋 美香(東京)	鈴木 崇之(新潟)
大橋 美香(東京)		牧 聡(新潟)
		瀬尾 雄樹(兵庫)
		吉野内 聡(愛媛)
		木本 龍太(福岡)
		薛 陸景(福岡)
		古川 彰吾(福岡)
		松下 晃子(福岡)
		内 玲往那(鹿児島)
		李 政哲(台湾)

平成12年度 大学院医学研究科入学者

「形態形成学」 山岸靖彰
「環境変異学」 張洪長、和
野千枝子、「病態病理学」
栃木直文、「環境病理学」
YANA SUPRIATNA 「感
染機構学」 IBRAHIM.M.
MOHAMED「工藤正道」
BELAL.USAMA.SALAH
「真菌分子機能学」 DRIVI
NYA ANTIRA 「病原真菌
系統・化学」阿布利帕麗述
「環境衛生学」 信田麻子、
千代田亘弘、林康博「医療
情報学」 福永亘、横井英人
「病態生理学」 有本央、今
村隆明、黒田泰久、K.C.S
UDHANSHU「穴戸忠幸、
住一、清宮美香、千葉哲博
成田佳苗、平出明、平澤雄
一「循環病態学」 小高謙一、
木村浩、武田真一、村田勝
宏、横山正樹「呼吸器病態
学」 赤出川賢治、高森幹雄
橋本友博「放射線機能学」
安田桜子「精神機能病態学」
高橋輝久、柳橋論「小児病
態学」有馬孝恭、LUONG
DONG CAO 「消化器病態
学」 赤井崇、石川千佳、上
里昌也、大平学、軽部友明
工藤秀寛、中島和恵、羽成
直行、宮本健志、森幹人、
吉永有信「呼吸器機能学」 青
山地治子「運動機能学」 青
木保親、腰塚周平、小谷俊

卒業生進路

「視覚病態学」 安達七生、
植村明弘「神経機能統御学」
伊藤誠明、牛久保修、三枝
敬史、山内利宏「神経機能
病態学」 金井教明、小松幹
一郎、太和田曉之、米津彰
一
千葉大(第二病理) 栃木直
文(一内科) 須賀ひとみ、
杉山晴俊、太和田勝之、奥
川英博(二内科) 古田俊介
本城聡、松澤陽子、山田伸
子(三内科) 笠谷知二、下
山立志、宮内正樹、森谷純
治(一外科) 門脇正美、田
村敦、土岐朋子、西村麻衣
山田千寿、吉橋学(二外科)
加賀谷曉子、角田慎輔、北
林宏之、小林豊、早野康一、
松永晃直、間宮俊太(整形
外科) 浅野由美、川辺純子
堀田正二(産婦人科) 大内
美香、鶴岡信栄(眼科) 神
林桃子、中山容子、田中香
織(泌尿器科) 小丸淳、果
山貴仁、深沢賢(耳鼻咽喉
科) 小野健一(小児科) 飯
田真紀、齋藤奈穂子、鈴木
由美、高梨さやか(精神科
神経科) 浅香琢也、荒川志
保、石川雅智、椎名明大、
松澤大輔(脳神経外科) 岩
本克宣(神経内科) 秋元武
之、橋本美保(小児外科)
武之内史子、中田光政、佐

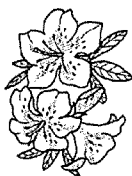
人事異動

藤東英(形成外科) 蔵持大
介、佐藤陽子、吉田行貴
(呼吸器外科) 上谷実礼、
山田義人(呼吸器内科) 上
山奈緒子、久我明司、高木
啓輔、永吉優、星野晋(救
急部・集中治療部) 幸部吉
郎、立石順久、東京大(内
科) 藤尾純子(外科) 石沢
武彰(形成外科) 小川直美
(小児科) 落合里衣、矢田
扶友美(精神神経科) 木納
賢「東京医歯大(精神神経
科) 山崎武、京都大(病態
栄養) 三宅あかり、岡山大
(泌尿器科) 三宅知子、九州
大(心療内科) 小山央、自
治医大(地域医療) 寺山修
史、慶応大(放射線科) 上
野彰久、昭和医大(形成外科)
藤田幸代、日本医大(皮膚
科) 前田誠造
「都立大久保」 篠浦央「日
本赤十字社医療センター」
可知芳則「都立府中」 角田
俊治「都立大塚」 土地岳彦
「旭中央」 葛西宏美、藤田
純一「船橋二和」 松岡角英
「千葉西総合」 藤巻茂謙、
吉永容子「亀田総合」 植山
太郎「川口市立医療センター」
江成太志、遠藤真美子「み
さと健和」 赤星拓「飯塚病
院」 岡田将「名古屋第2赤
十字」 鈴木登士彦「沖縄県
立中部」 椎木創一
教授昇任
解剖学第一
森 千里(旭川医大昭59)
助教昇任
急救医学
織田 成人(昭53)
(人工臓器部講師より)
講師昇任
生理学第一
中澤 健(平4)
(同助手より)
病理学第二
窪澤 仁(昭56)
(同助手より)

千葉県市職員異動

保健所長
内田佐太臣(東邦昭37)
船橋(佐倉より)
溝口 勝(昭41) 佐倉
(習志野より)
がんセンター
大崎達也(昭55) 婦人科
主任医長(医長より)
三上春夫(昭57) 研究局
疫学研究部長(救急医
療C麻酔科医長より)
柿澤公孝(昭63) 肺外科
医長(県西病院より)
五月女隆(平2) 臨床腫
瘍科医長(癌研究会よ
り)
木下知明(平2) 整外医

長(結城病院より)
根津雅彦(平3) 内科医
長(国立がんセンター
より)
原 太郎(聖マリ平4)
内科医長(千大より)
田崎健太郎(弘前平5)
外科医長(千大より)
救急医療センター
宮田昭宏(昭62) 脳外医
長昇任
徳永 仁(鳥取平5) 脳
外医長
精神科医療センター
平田豊明(昭52) 診療部
長(主任医長より)
こども病院
中村 明(昭48) 一内科
部長(小児科部長より)
高柳正樹(金沢昭50) 二
内科部長(主任医長よ
り)
沖本由理(昭50) 三内科
部長(主任医長より)
甲原玄秋(東海昭50) 歯
科部長(主任医長より)
伊藤千秋(昭55) 脳外主
任医長(医長より)
青嶋裕之(昭55) 小児循
環器主任医長(医長よ
り)
循環器病センター
松尾浩三(昭55) 主任医
長(医長より)
熱田藤雄(日大昭55)
歯科主任医長(医長よ
り)
平井伸治(昭59) 脳外医
長(千大より)
大橋幸雄(三重平1) 心
外医長(深谷日赤より)
梅岡 誠(平1) 呼内医
長(昇任)
石井良実(山形平5) 内
科医長(昇任)
佐倉病院
竜 崇正(昭43) 院長
(医療局長より)
野本泰正(昭38) 医療局
長(診療部長より)
大西正記(昭58) 内科部
長(医長より)
北崎 等(昭60) 整外部
長(医長より)
景山雄介(昭58) 病理検
査科部長(医長より)
藤田淳一(平4) 内科医
長(千大より)
黒田央又(平4) 内科医
長(千大より)
小野克弘(平5) 内科医
長(千大より)
東金病院
榎本和夫(福島昭53) 診
療部長(外科部長より)
小林 治(昭55) 産婦部
長(主任医長より)
丹羽直樹(昭63) 神内医
長(下都賀病院より)
石塚俊治(昭62) 内科医
長(千大より)



組織再編による名称の変更
 社会部技監より健康福祉
 部技監・身体障害者福祉
 事業団派遣（リハビリセ
 ンター）
 村田忠雄（昭36）センター
 長
 長尾龍郎（昭40）
 太田東吾（昭43）
 高地光世（日大昭49）
 佐々木健（昭50）
 健康福祉部技監・千葉市派
 遣・小倉敬一（昭36）
 （船橋保健所長より）
 健康福祉部技監・対がん協
 会派遣・林 学（昭39）
 （がんセンター画像診断
 部長より）
 部長より）
 退職
 真家雅彦（昭35）衛生部
 技監
 小林康弘（昭35）東金病
 院医療局長
 土屋恵一（信州昭36）佐
 原病院院長
 宮津三津夫（昭47）東金
 病院内科部長
 松戸市立病院
 香西 襄（昭38）院長
 （副院長より）
 渡辺 寛（昭41）副院長
 （医療技術局長より）
 藤塚光慶（昭43）副院長
 兼診療局長（診療局長
 より）
 川村健児（昭43）医療技
 術局長兼小児外科部長
 秋草文四郎（昭50）病理

部長（千大助教教授より）
 退職
 篠原寛休（群大昭35）院
 長
 小幡五郎（昭36）副院長
千葉県医師会新役員
 （○の中の数字は選任回数
 最下段は出身地区医師会名
 を示す）
 会長
 藤森宗徳（昭37）②千葉
 副会長
 安達元明（昭38）①大学
 鈴木弘祐（日大昭39）①
 鎌ヶ谷
 理事
 井上雄元（金大昭39）市
 原
 木下 昌（昭38）④千葉
 水野幸一（長崎昭40）千
 葉
 守 正英（慈恵昭44）匠
 瑩
千葉県地区医師会長
 長 生・武田從信・昭33
 香 取・亀谷秀夫・昭33
 安 房・青木 謹・昭36
 山 武・伊藤俊夫・昭36
 金沢大
 八千代・杉岡昌明・昭37
 海上・佐々木守・昭37
 大 学・安達元明・昭38
 夷 隅・土屋 信・昭38

国立・大塚嘉則・昭39
 習志野・梶本伸一・昭39
 福島県医大
 匠 瑩・増田 武・昭39
 日本医大
 松 戸・武井孝達・昭41
 君 津・中村和成・昭41
 東京医大
 市 原・鎗田 努・昭41
 銚 子・片倉 透・昭42
**平成11年度
 第3回常任理事会議事録**
 日 時 平成12年2月23日
 （水）16時～17時30分
 場 所 ペリエホール（千
 葉駅ビル5階）
 出席者 井出源四郎、貫洞
 一夫、近藤洋一郎、大藤正
 雄、大浜博利、沖真澄、小
 幡裕、国井光智、越川衛、
 長澤仁一、萩原彌四郎、茂
 又眞祐、山上健二郎、木内
 政寛、佐藤甫夫、嶋田裕、
 鈴木信夫、中島祥夫、増田
 善昭、矢野明彦、大沼直躬
 開会に先立ち、井出会
 長より挨拶があった。
議 題
 一、表彰者・昇任者の四金
 会招待について近藤副会
 長より説明があり承認さ
 れた。
 二、役員改選について増田
 理事より説明があり、ご
 退官予定の学内の佐藤甫
 夫、嶋田裕両理事に代わ
 り、落合武徳、瀧口正樹

（学内）の各氏が選出さ
 れた。
 会長・副会長の交代につ
 いては次回常任理事会で
 検討することとなった。
 三、平成12年度の行事日程
 について木内理事より説
 明があり承認された。
報告事項
 一、予算執行状況について
 中島理事より報告があっ
 た。
 二、ゐのはな同窓会賞選考
 委員会の新委員が選出さ
 れ、現在平成12年度のゐ
 のはな同窓会賞の募集を
 行っている旨、矢野理事
 より報告された。
 三、会員名簿の発行につい
 て嶋田理事より報告があっ
 た。
 四、同窓会報の発行状況が
 鈴木理事より報告され医
 院名の広告を検討中であ
 る旨の説明があった。
 五、辛亥革命記念碑改修工

事の計画につき中島理事
 より報告があり、費用に
 ついて討議された。
 六、その他
 協定校となった中国承
 徳医学院へゐのはな同窓
 会長の楯を贈った旨、嶋
 田理事より報告があった。
四金会
 引続き同所で四金会が
 行われた。
 レンドゲン賞受賞の市
 川平三郎氏、日本医師会
 最高優功賞受賞の伊藤敏
 夫氏より各々ご挨拶をい
 ただき盛會裡に歓談の時
 を過ごした。
 本号より、同窓会員の
 病院や診療所の広告を兼
 ねたご寄付を頂くことを
 企画致しました。ご希望
 の方は同窓会事務局まで
 お申し込み下さい。

日産厚生会 玉川病院 気胸センター

医師募集

連絡先：

〒158-0095

東京都世田谷区瀬田4-8-1

日産厚生会 玉川病院 気胸センター

武野良仁

TEL：03-3700-1151

FAX：03-3700-2090

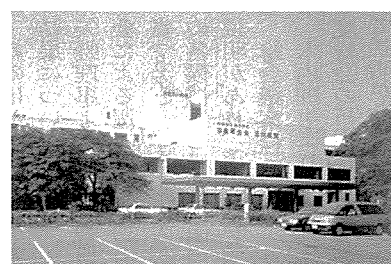
home page:

<http://www1.kcom.ne.jp/tamagawa/>

e-mail:nittama@ma.kcom.ne.jp

当院は1953年創設以来、千葉大学との関係が非
 常に深く、呼吸器外科はずっと第1外科（当時：
 河合直次教授）の同門が守ってきました。

当院は自然気胸内視鏡治療発祥の地だけあって、
 現在では患者が全国から来院、気胸の入院患者は
 年間平均330、常時20名以上の入院があり、毎週
 6～7例の内視鏡手術を行っています。最近では自
 然気胸のみならず肺気腫、線維症、癌も少なくあ
 りません。スタッフは武野良仁センター長（S.28
 卒）、栗原正利呼吸器外科部長（S.54卒）のほか
 研修医2名。長 晃平 内科医長[呼吸器]（S.60
 卒）、肺研からの出張医師1名も常時センターと
 協同して診療、研究を行っています。



今回、気胸センターのスタッフとして
 優秀な後輩を募集します。

募集人員：1名（呼吸器外科）

年 齢：35歳位まで

勤務形態：医長（年齢により医員）

週1日研究日あり

給 与：病院の給与体系

承德医学院との交流協定締結

「千葉大学医学部と承德医学院との間の学術交流及び協力に関する協定」が締結された。本協定は2月7日に谷口医学部長が署名し、一方、承德医学院における調印式は2月11日に行われ、連絡担当者嶋田教授と国際交流部会長丹沢教授とが出席し、高福禄学長が協定書に署名した。承德医学院は観光の名所として有名な中国河北省承德市（北京より北東約250キロで旧満州内）にあり、約50年の歴史を有する医科大学で、医学部、中医学部（伝統医学部）、看護学部（漢方薬研究所）を有している。今後両校間で学術交流と協力だけでなく、友好の深まることが期待される。なお、承德医学院からは本学部に巨大な掛軸の寄贈があり、また承德医学院学長にはあのはな同窓会長から記念楯が贈呈された。本学部では米国ノースカロライナ大学チャペルヒル校および同大学デンタルリサーチセンターとも部局間交流協定を結んでいる。



左から承德医学院袁書記長、高学長、嶋田教授、丹沢教授

あのはな同窓会 学外研究助成募集要項

- 第2回（2000年度）あのはな同窓会学外研究助成の応募を左記により受け付けます。なお研究費の交付を受けた者は3年以内に同窓会総会（毎年6月）にて研究成果の発表を行っていただきます。
- 1、助成対象 本会会員（甲および乙）で、大学およびそれに準ずる研究所以外の施設に勤務している医師および歯科医師が、個人またはグループの代表となつて行う研究。
 - 2、助成金 本年度の助成総額は300万円とし、1件につき50～100万円を予定しています。
 - 3、応募方法 6月1日から8月31日までに申請して下さい。申請用紙は同窓会事務室宛に請求して下さい。
 - 4、助成研究の決定 選考委員会および常任理事会の議を経て、会長が行います。
 - 5、問い合わせおよび申請用紙請求先 千葉大学医学部内のはな同窓会事務室
右選考は「あのはな同窓会学外研究助成規程」（あのはな同窓会報第123号に記載）にもとづいて行われます。

平成12年度千葉県あのはな会

総会 御案内

日時 平成12年5月20日（土）
15時より

場所 千葉京成ホテル
☎043-222-2111

特別講演 16:00～17:00
座長 若新政史 先生
「情報革命」講師 里村洋一 教授
懇親会 17:30～ 会費 10,000円

平成12年度 第1回常任理事会議事録

日時 平成12年4月26日
(木) 16時～17時30分
場所 千葉スカイウインドウズ東天紅（セシニティタワー）22階
出席者 井出源四郎、大井利夫、大藤正雄、大浜博利、沖真澄、落合武徳、小幡倫貫、一夫、笠川猛、木内政寛、香田真一、越川衛、近藤洋一郎、税所宏光、三枝一雄、阪信、佐藤甫夫、鈴木信夫、滝口正樹、長澤仁一、中島祥夫、萩原彌四郎、増田善昭、三井静、茂又眞祐、矢野明彦、山上健次郎、渡邊武各理事
開会に先立ち、井出会長よりご挨拶があった。

- 三、平成12年度予算案について
中島理事より説明があり、承認された。支部支援費の増額等が提案され、総会に提案することになった。
- 四、役員選出について
井出会長より退任の申し出があり、後任会長を総会において選出する旨承認された。また、名誉会長、副会長、参与等の選出について総会に推薦することが承認された。
- 五、増田理事より佐藤、嶋田両理事の後任選出について説明があり、落合（庶務）、滝口（事業）の常任理事選出が承認された。
- 六、増田理事より会則改正について説明があり、常任理事の定員を30名以内から30名前後とする案が承認され、総会に提案することとなった。
- 七、あのはな同窓会賞選考結果について
矢野理事より、選考委員会による選考経過と功労賞（3名）、学術賞（7名）の各候補者の推薦理由の説明があり、承認された。
- 八、総会議案について
木内理事より平成12年度総会の日程、議案について説明があり、承認された。

報告事項

- 一、鈴木理事より同窓会報第124号の発行予定について報告があった。
- 二、中島理事より医学部本館前庭の辛亥革命記念碑の整備について報告があった。

四金会

引き続き同所で四金会が行われた。税所理事の司会で、井出会長のご挨拶、貫洞副会長の乾杯ご発声に始まり、和やかに歓談の時を過ごした。

編集後記

「同窓会活性化」、「温故知新」、「情報整理」、「社会の変革」等々は、本紙を編集する上で注目しているキーワードです。今回より、「会員交流」という観点から新たに、会員諸氏の経営する病院の紹介を企画しました。奮ってご参加下さい。

ところで、本紙の発行部数は約八千です。従って、例えば、会員のご家族などを含めると、優に一万人を超える読者がいると予測されます。それらの読者層に期待される会報とするには、さらにどのようなキーワードが必要か、ご提案をお願いする次第です。

（鈴木信夫）